

宮良當壯全集

18

第一書房

宮良當壯全集 18

昭和五十八年十月十五日 印刷
昭和五十八年十月二十日 発行

著者 宮 良 當 壯
発行者 村 口 一 雄
発行所 第 一 書 房

113 東京都文京区本郷六―一六―二
電話 東京 八一五―一〇七二
振替 東京 四―三九―二〇

印刷 日成エンタープライズ
製本 有限会社今泉誠文社

定価は箱に表示してあります 乱丁本・落丁本は直接小社
でお取替え致します (送料小社負担)

凡 例

一、本全集は、宮良當壯が公表した著書・論考・随筆・講演記録、ならびに未公表の論考・手稿類などを可能な限り集大成することを期した。

二、本文は底本（底稿）の原文を忠実に翻刻することを原則とした。ただし次の要領で原文を整理した。

- (1) 漢字は、当用漢字、同補正案にある字体はこれを使用し、また一部の俗字、同字などで現在常用されないものは通用のものに改めた。ただし著者独特の書きぐせである用字はそのままとした。
- (2) 当用漢字に含まれないため、活字化に際し、漢字表記が仮名表記または漢字・仮名混交表記に変えられたと思われる熟語等は、適宜、編集者の判断で漢字に改めた。
- (3) 仮名遣いは、原文の基調に従い、歴史的仮名遣いまたは現代仮名遣いに統一した。
- (4) 原文にある、おどり字「ム」「レ」「々」「／＼」等は、文字を当てることなくそのまま残した。
- (5) 振り仮名の表記は、統一せずに原文のままとした。また新聞・雑誌等に掲載された論考の総振り仮名は、重要なものだけを残し、他は省略した。なお新聞原稿で（ ）づきで付された振り仮名は、通常的位置に戻した。
- (6) しかし著者による漢字・送り仮名・振り仮名等の不統一は、そのままとした。
- (7) 著者が刊行後または発表後に修正・加筆したものは、これを採用した。
- (8) 引用文および引用的部分は、原則として原文のままとした。ただし重要な誤植・脱落等については、原典に拠

り訂正したが、論旨にかかわるものについては、そのままとした。

- (9) 誤字・脱字は、原稿ミスと思われるものを含めて、それが明らかである場合に限り訂正した。底本（底稿）の文字が不鮮明な場合は、他に照らして編集者の判断で補ったが、判読不能の文字は□で示した。また明らかな脱語は、これを（ ）づけで補った。

- (10) 傍点・圈点等は、ごく一部のものを除いて傍点、に統一した。

- (11) 孔版印刷のもので傍線の頻繁なものは、これを削除した。

- (12) 「」や（ ）が不統一に用いられている場合は、適宜、統一した。

- (13) 底本の皇紀年数は、すべて西暦年数に改めた。

- (14) 原文中の書名・雑誌名・新聞名には『』、論文名・能（謡曲）および狂言名・組踊名・歌謡名等には「」を付した。

- (15) 収録論文の発表または執筆年月日、掲載書名、あるいは新聞名、雑誌名および巻号数は、各論文の末尾に付記した。

三、音声表記について、次の要領で原文を整理した。

- (1) 底本（底稿）の音声表記のうち、筆記体の字母は、すべて活字体に統一した。
- (2) 原文の音声記号 [ʔ]、[A] はそのままにした。
- (3) 原文の音声記号 [ɣ] は [ɣ] に統一し、[ɸ] はスモールキャピタル [ɸ] で示した。
- (4) 原文の長音符 [ː] は [ː] に統一した。

(5) 原文の音声記号「ㄣ」は「ㄣ」に統一した。

(6) 著者が底本（底稿）に修正・加筆したものはそれを採用した。

(7) 音声表記中、明らかな誤りと思われるものは、編集者の判断でこれを正した。

四、本巻には、未刊の著書「日本方言叢書」、「琉球のことば」、雑誌連載の「八重山諸島物語」、講義録『琉球文学選』ほかを収めた。

五、本巻の編集は当間一郎、石垣博孝が担当した。また校正には狩俣恵一、大城学、島村幸一、名波庄吾氏らの援助を受けた。

目次

八重山諸島物語

1

(一) 八重山へ 3

(二) 音表及語法 6

(三) 地文 20

一、位置 二、構成及地素 三、地形、地勢、地質 四、平原
五、山岳 六、河流 七、港湾 八、氣候 九、天産

(四) 人文 55

一、村邑及戸数人口 二、産業 三、交通 四、育英界の今昔

(五) 祖先崇拜国の面目 126

神社、仏閣 祖先崇拜の盛況

(六) 名所旧跡 151

(七) 風俗習慣 156

一、方角の称呼 二、時刻の称呼 三、村街の体裁 四、宅地内の配置及家屋の制

五、門を造るの説及四隅の魔除礼

六、井戸の名称と年代関係

七、服装略解

八、常食及嗜好物 九、犬に関する奇信 十、猫に関する奇信

十一、出産に関する風習 十二、諸慶事 十三、諸祭忌 十四、年中行事

十五、遊戯及娛樂 十六、入墨の風廃滅 十七、頸玉と内地商人

(八) 史実断片 199

一、有史以前の八重山 二、開闢当時の世態 三、赤蜂の乱 四、赤蜂余録

五、明和八年の大海嘯の前後 六、天保の義人浜崎与利翁 七、ペルリ寄港説

八、日清戦争と八重山 九、置県後の政治変遷

(九) 言語一斑 228

一、身体に関する名称 二、血族に関する称呼 三、社会的階級に関する名称

四、日用器具及食品の名称 五、数及月の称呼

日本方言叢書

序

天体 262

天象と人間 262

天の糯米俵 265

太陽の方言も色々 269

月のゑくぼ 277

三日月の眉根搔き	291
月とスッポン	295
夜の空は銀すなご	299
北の一つ星	308
船星や柄杓星	315
いもゆで星と花嫁星	321
天の大河原	331
スバル星と民俗	341
箒星と放屁星	354
星の嫁入り	364
三ツ星と親担ひ星	374
方位	382
方位と暦	382
ヒムガシとアガリ	399
西とイリ	403
南とハヘ	407
北とニシ	413
方位雑称	420

琉球文学選

凡例

I、誦詠 433

一、みせせる 二、おたかべ（御崇べ。祝詞）

三、御拝つづ（謝辭） 四、やらしい 五、よんごと（寿詞）

II、古謡 479

一、くわいにや 二、ゆんた 三、じらば 四、あやう（あやぐ）

III、おもろ 540

序：研究法 一、おもろびとの恋愛 二、船と航海と港

IV、琉球歌謡 593

一、奄美大島の歌 二、沖縄の歌 三、宮古の歌 四、八重山の歌

V、組踊 668

VI、狂言 691

VII、人形芝居（京太郎・チョンダラー） 696

琉球のことば

I、まえがき 699

Ⅱ、ことばと歴史	700
Ⅲ、琉球のコトバのあらまし（総論）	724
天文教室・コトバの教室	737
スバル星はすばらしい星だ	739
朝のイモユデ星と夕方の花嫁星	752
解 題	769
書 誌	789

八重山諸島物語

余は絶海の孤島とも称すべき琉南の八重山に生れ、十七歳にして郷を出で、東都に來り独立苦学すること既に十有三星霜。此間郷土研究に腐心して自ら実地踏査すること二回、或は古書珍籍を漁り、或は古老有識の士を訪ねて古きを問ひ、或は古墳を発掘して古器物を得、或は山に或は海に出でて親しく調査研究せり。

先般金田一京助氏の御紹介にて石田收藏氏を知り同氏のお勧めによりて左に一文を草し、広く学界諸賢の御示教を仰ぐ次第なり。

本文を草するに当り特に一言せざるべからざるは前田太郎大兄のことなり。前田大兄は余が上京以来十余年間の知己にして常に陰に陽に余を援助し激励せられたる恩人なり。殊記して謝意を表す。

(一) 八重山へ

九州の南端より飛石の如く点々として弧状をなし、台湾の東北端に連る大小数十の嶋嶼は東支那海を擁して我が帝國の南弓をなせり。最も北なるを吐噶喇諸嶋、其の西南に連れるを大島諸嶋、その又西南即ち弓弧の中央に當りて宛然龍蛇の珠玉を弄べるが如く東北より西南に横はれるは沖繩島なり。沖繩島より更に西南方に當り、台湾の東海洋中に碁布するを宮古群嶋及び八重山群嶋となす。而して此二群嶋を一括して先島群嶋といふ。わが八重山群嶋は台湾より一四二浬、宮古より九一浬、沖繩より二四六浬、鹿兒島より六三〇浬、東京より実に一、五七〇浬の所に在り。今

東京より八重山に至るには大阪或は神戸より乗船するか、又は鹿児島より乗船するなり。

偕て八重山見物にと輕装して一日の朝六時に東京を發せむか、三日の午前九時頃鹿児島に着くべし。幸ひにも便船ある時には直ちに乗船すべきも大抵一二泊を旅館に費すべし。今、三日午後三時好便に乘じたりとせんか。四時間にして鹿児島湾口を離れ、右手に薩南の偉觀たる開聞岳の夕陽を浴びて天女の如く秀麗なるを稱しつゝ、左方に佐多岬の燈台の明滅を見て全く塵都遠く航海の気分を覚ゆるなり。薄暮船は右に硫黄、口永良部の兩島を見、左、海波渺茫の間に種子、屋久二島を望みつゝ汽罐の音勇ましく西南航を続けるなり。海上月ある夜には幾度か甲板に出でて雲の如くなるを、あれが口之島、中之島、諏訪瀬島なりと指示することあり。又月なくて暗闇墨の如き晩ならんか。船底に蟄居して声なく、單調なる汽罐の音と舷外に渦卷く濤声とを聞きつゝいつしか無心の境に陥るなり。或は又天候惡変して狂瀾怒濤船体を翻弄して吞噬せんとせんか。七島灘の難航には陸上の覇者も海鼠もたゞならぬ様して嘔吐して長霓を演ずるに至る。天晴れて快闊、海穩かにして鏡の如くんば船池中を迂るに似、翌四日正午大島の名瀬港に投錨し、貨物の陸揚げ、船客の便乗のため數時間を消し、薄暮汽笛一声煙を残して南航を續く。船には内地人、琉球人、台湾人等數多同乗して各々相通せざる言葉で談笑せり。船は吾等が夢幻の間に鳥島と徳之島との間を過ぎて一夜を伊平屋島の北航路に過すなり。翌未明甲板に出でて東望すれば愈々長き沖繩島平凡に起伏して煙波の間に漂へるを見る。旅馴れたる人に聞けば、彼方に高く聳ゆるが嘉津字岳恩納岳なりと教ふ。伊江島の西方を過ぐる頃心は早や那覇に飛び、どの辺ですと聞けばボーイ君、ちぎですと答ふ。然るに其のちぎが却々以て速かに来らず、六時間間疾駆して残波岬を越え、漸く那覇に正午前後に着す。

船上より見渡せば市街は真紅に燃えたるが如し、之瓦の赤きが故なり。市の西部の新築は火災後の辻遊廓なり。里外に白く点々たるは有名なる琉球の墳墓なり。愈々港口近く船を進むれば昔倭寇に対する防備として築いた砲臺が左

右の珊瑚礁上に並峙して遊客の好奇心をそゝる。左手に見ゆるが三重城、右手に見ゆるが屋良座森城なり。港口の狭小なることは又驚くべく、纔かに三四十間と見ゆるなり。港内は稍々広く、恰も胃囊に入るが如く、棧橋あるを便となす。こゝより先島航路の船に移乗すべけれども船は大抵十日に一回の出帆なれば、出帆せし翌日那覇に着かば十日遷延せざるべからず。而も天候險惡にして波濤高からむか、延期又延期、焦燥すること屢々なり。現に余は大正二年には帰省に二十六日を要し、昨年は十九日を費せり。斯る不幸に一旦遭はば運天港に遊びし心して、近傍の名所旧跡を探ぐるをよしとす。先づ名にし負ふ波之上宮に参拝して絶好の眺望と断崖の奇趣とを称したる後五銭の車賃を投じて十余町の奥武山公園に遊ぶべし。その帰途には長寛の如き明治橋畔の風月楼に憩ひて、琉球料理の珍味を味ひつゝ此処が藩政時代の海外貿易公倉たる御物城の跡たりしことを聞くべし。それより電車に乗じて一里余を隔つる首里に登り、旧王城並に街衢の奇を見て往時を偲ぶべし。幸ひに天候恢復して愈々先島航路の船に乗ずれば、船は例の胃囊形の港口を出で大海の山濤に、逆つて南航を始むるなり。茲より船稍々小さくなり、波は潮流の影響を受けて高く、為に船体の動揺すること恰も木の葉の翻弄せらるゝが如く、痛快なり。牛豚の搭載ある時にはもう／＼／＼／＼悲鳴をあげて修羅裡に処るが如く喧然騒然、百雷の一時に激墜するが如きこと昼夜を絶たず。牛は愚性にして船の動揺愈々急なれば愈々立たむとするなり。倒れては立ち転びては起く。遂に角を折り蹴爪を挽ぎ四肢を傷けて鮮血淋漓たる惨状を呈すること屢々これあり。船波に逆ふ時には前後動にして酔ふこと勘けれども横波を受くる場合には左右動激しく酔ふこと甚し。老幼男女嘔吐して各々金盥を占有せり。斯る悲劇を觀て航海難を感じつゝ一夜を過せば翌日午頃宮古島に着す。数時間の碇泊の後、夜こゝを出帆すれば翌早朝僅れし八重山の石垣港に到着す。東京を出発してより実に十日目なり。海陸無事なりしを祝すべし。

八重山へ入る前に研究を便利ならしめんがために、此土地特有の音表を示し、且つ簡單なる語法を説明せんとす。乞ふ、後に述ぶる言語部を参照せられよ。

(二) 音表及語法

わが八重山語が普通語に相似たるもの多きに拘らず、世人に解し難くして支那語の一派ならむと誤るゝは、主として其の発音の困難なると語法を知らざるが故なりと思はざるべからず。而してわが郷には從來其の発音を表はすべき完全なる文字符号なく、事を記し意を写すには多く漢字と仮名とを混用せり。従つて其の完全なる書写発表を欠き、自ら損し、人をも誤らしめし次第なり。余は夙に之を遺憾となし、久しく之が研究作成につとめたり。今左に其の音表を示して順次説明を加へんとす。

第二種	第一種	第一段		第二段		第三段		第四段		第五段		第六段		第七段	
		ア	[a]	イ	[i]	ウ	[u]	エ	[e]	オ	[o]	カ	[ka]	キ	[ki]
		ヤ	[ja]	イ	[i]	ウ	[u]	エ	[e]	オ	[o]	ケ	[ke]	キ	[ki]
	第二種	ア	[a]	イ	[i]	ウ	[u]	エ	[e]	オ	[o]	カ	[ka]	キ	[ki]
		ヤ	[ja]	イ	[i]	ウ	[u]	エ	[e]	オ	[o]	ケ	[ke]	キ	[ki]
		ウ	[u]	エ	[e]	オ	[o]	カ	[ka]	キ	[ki]	ケ	[ke]	キ	[ki]
	第三種	ア	[a]	イ	[i]	ウ	[u]	エ	[e]	オ	[o]	カ	[ka]	キ	[ki]
		ヤ	[ja]	イ	[i]	ウ	[u]	エ	[e]	オ	[o]	ケ	[ke]	キ	[ki]
		ウ	[u]	エ	[e]	オ	[o]	カ	[ka]	キ	[ki]	ケ	[ke]	キ	[ki]